Aブロックの「食」ベスト3です。

あなたなら、どの作品を推しますか。
そして東工大生が1位に選んだのは・・・？

答えは作品のあとの講評にてどうぞ。

A-5

捕食

その姿を一目見て、今日の夕食はこいつにしようと心に決めた。

◇

キィィと唯一の扉が閉まる音が聞こえる。外界から遮断された閉じた空間が出来上がった。
古びた木造の家の中には、赤い頭巾をかぶり籠を下げた人間と、その祖母の格好をしてベッドに寝ている狼だけだ。
子供らしいテクテクという足音が響いて、互いの距離が縮まった。
改めて、この部屋の中にいる自分以外の生き物を眺める。その顔はこれから起こることをこれっぽっちも理解していないようで、にこにことした色で埋め尽くされている。
ひどく、滑稽に思えた。
籠の中に入っているパイのためか、甘く香ばしい匂いが漂う。もちろんそれも後で食べるが、今日のメインはこの目の前の獲物だろう。心がはやる。思わずこれを蹂躙したいという衝動に駆られる。

「あら、おばあさん、どうしてお耳がそんなに大きいの？」

だからだろうか、つい戯れにこんな言葉を口にした。

「それはね、お前の声がよく聞こえるようにさ」

なんて愚かしい会話だろう。自分も参加しておきながら、第三者のようにそう思った。

「おばあさん、どうしておめめがそんなに大きいの？」
「それはね、お前がここにいるのがよく見えるようにさ」

児戯にも満たない会話が続く。ふと、そんな子供じみた会話をどこか楽しんでいる自分に気がついた。
騙されているとも気づかずに、満面の笑みを浮かべている相手。それに合わせて笑みを返しながらも、内心せせら笑っている自分。
この強者ゆえに弱者を謀れるという優越感に、知らず興奮しているのだろう。

「おばあさん、どうしておててがそんなに大きいの？」
「それはね、お前の頭をなでやすいようにさ」

今更ながら、そんなわけがないだろう、と心密かに嘲笑う。
三角に尖った耳。鋭い眼光を備えた目。爪で切り裂くための手。これが狼のものでなくてなんだというのだろうか。

「おばあさん、どうしてお口がそんなに大きいの？」

そして、決定的な質問。
ままごとはもうあきた。そろそろこの生き物を仕留めることとしよう。

「それはね、お前を食べやすいようにさ」

そう言って、馬鹿にしたような笑いを浮かべてボタボタと涎をたらしながら、私の目の前で狼が大きく口を開いた。
私はクスリと笑みをこぼすと、それ目掛けてさっきまで背負っていた猟銃の引き金を引いた。

いただきます

▽聞いた話によると最近は小学校の給食の時間に「いただきます」と言うことに対して先生にクレームをつける親が居るらしい。「私が給食費を払っているのだから、学校に『いただきます』と言う筋合いはない！」という理屈だ▽果たして「いただきます」とは単に「もらうの謙譲語」という意味なのか？▽恐らく違うだろう。この言葉には色々な感謝の意が込められている▽食材を提供してくれる人達、料理を作ってくれる人達、そして何よりも食べられる生命に対して▽実は昔から件の親と同じ様な考え方はあった。例えば、家長である父親は「いただきます」と言わなくてもいいというように▽こういう人達は感謝の対象がお金になってしまっている。この感覚のズレ方は何となく悲しい▽「いただきます」「ごちそうさま」は共に英訳できない。日本らしい「礼」を重んじる文化が生み出した良い言葉だと思う▽だからこそ、この言葉を大切にして欲しい。百年後に「いただきます」が死語辞典に載るような事態だけは、何としても避けたい。

Priceless

「あたし、ダイヤの指輪が欲しいなぁ」
結婚を間近に迎えた妹のナナがそう呟いたとき、俺は兄として任せろと言うしかなかった。最近の日照りで作物が思うように取れず毎日の生活でさえ苦しいのは、ナナもわかっていた。それでもあいつは欲しかったんだ。ここからずっとずっと、離れた土地に嫁ぎにいくから。交通手段は徒歩と馬しかない・・・何も言わなくても、もう二度と帰ってこないであろうことはわかっていた。

俺は働いた。働いて、働いて、働いた。
家の農場を耕すことはもちろん、夕方からは居酒屋で料理を運び、日付が変われば村の警備をした。睡眠時間は何分かという毎日。それでも俺は、働いて、働いて、働いた。
妹が駄目もとで放った台詞を現実に出来るのは俺しかいないと思っていた。まぁ、ずっと守り続けてきたものを手放すという淋しさを、忙しさで紛らわそうとしてなんかいない、というと嘘になるが。。

そして、ナナが結婚する前日。俺は家計も何もかもほっぽりだして、ダイヤの指輪を買いにいった。

まさか、金が一桁も足りないなんて。

俺は働いた。働いて、働いて、働いた。駄目だと思っても働いた。金さえあれば買えるんだ。一生ナナの側にあるものが金さえあれば買えるんだ。その一心だけだった。
そのときナナが血相を変えて走ってきた。口を開きかけようとするがあまりに息が切れて咳き込み、言葉にならない。
「どうした、何かあったのか?」
俺が敢えてゆっくり優しく言うと、ナナは泣きそうになりながら顔を上げた。あぁこういうことが何度あっただろう。きっとそれは大事件ではなくて、ちょっとしたこと。だけど何があってもナナはまず俺に報告した。そして俺も一緒になってそれを考えた。ずっとずっと繰り返してきた毎日。それが、この太陽が沈んでもう一度昇るとき、-----終わる。
「たいへん、なの。太陽が・・・食べられちゃう!」

え、と俺は呟いて空を見上げた。黒い影が太陽の近くに映る。それは、ゆっくりとだが徐々に徐々に太陽に近づいていった。俺はあぁと微笑みながら頷いた。空なんて、ずっと見てすらいなかったから、気づかなかった。なるほど、確かにこれは一大事だ。
「確かに、太陽は食べられる。」
「じゃあ、じゃあどうするの!?」
俺はさらに微笑むと、ナナの頭をぐしゃぐしゃ撫でた。

そのとき突然はっとした。・・・とんでもない太陽からのプレゼントに。
神は・・・俺たちを見ていてくれたのだろうか? 俺が働いて、働いて、働いたからか? それともナナを祝福してくれているのか? なぁそうなのか?
俺はそっとナナの肩を抱き寄せた。側にある濃い緑の半透明の葉を3枚ちぎり渡した。遮光板代わりになるだろう。無言で渡すとナナは訝しそうにそれをかざした。太陽が緑色の球体に見える。
それがゆっくりゆっくり欠けていく。黒い影である月にゆっくりゆっくり食われていく。

そして。
太陽が全て隠れたとき、俺はそっとナナの分も遮光板代わりの葉を取り除いた。
「兄ちゃんからお前に、最後のプレゼントだ。よく見ろよ。」
ゆっくりと強く肩を抱きながらナナに呟く。次の瞬間、ナナが息を飲んだ。ぼろり、涙が落ちたのを俺は見た。 一瞬だけだったけれど、太陽の光が黒い月から一部だけ漏れ出て-----まるでそれは、ずっとずっとナナが欲しがっていた、-----。

結婚おめでとう、俺の愛するナナ。 ・・・幸せに、なれよ。

「食」本選Ａブロック作品講評

１　生きる　5位　3ポイント

今週の表紙です!?
この勇気に乾杯！　とあちこちで好評で、意図は成功、といったところでしょうか。
ただ、いかんせんコンセプトがシンプルすぎ。別の漢字を混ぜるなど、もっと遊びがほしかった。

２　気づいたこと　4位　7ポイント

とてもシンプル、でも、その言葉ひとつひとつに「　」の重みまで付けて持たせた気持ちの大きさが、読み手に伝わっての高順位となりました。「親」だけじゃなく、といったフレーズは、母の日の気持ちの延長でしょうか。
お茶会で作者さんと話したら、考え抜いたすえに、あのシンプルレイアウトになったんだそうな。

３　生存への食　9位　0ポイント

シンプル作品が続きます。
これは議論のまだはじめの部分、という印象です。強者・弱者へとせっかく抽象化したのですから、その先へ行きたかった。
タテ倍角は、ただ読みにくいだけなので、ご用心。

４　食に関する謎のまとめ　5位　3ポイント

着眼のユニークさとネタのおもしろさを、まじめ風口調でうまくくくって、その落差が楽しさを醸し出して、なかなかいい感じでした。
たしかにバナナの帰属は世代を超えての謎です。

５　捕食　1位　33ポイント

わーお！　みごとに騙されましたよ猟師さん。
おなじみのお話だから、ついつい既成観念で読んでしまう迂闊さに、あざやかに背負い投げ。爽快爽快。再読してまた佳し。とてもここちよい読後感でした。
あんのじょうの圧勝首位、おめでとう！

６　新おにぎりをつくろう　8位　1ポイント

各種おにぎり勢揃いといった賑やかさがうまく演出されていました。
少し取材を入れて細部を支えると（カレーおにぎりを〇〇で販売してた、とか）、もっと具体的でおいしくなりそう。

７　本当の自分！　9位　0ポイント

いともカンタンに覆る決意。ダイエットなんて、所詮そんなもん。
アイスみたいにすぐ溶けてしまう儚さを、さらっと伝えて親近感がわきます。ラスト「少年」と呼ぶのは、ちょっと唐突だったか。

８　殺人事件　9位　0ポイント

「人」か？　と思いつつ、途中でやっぱり「人」じゃなさそうと気づいて、でもクジラとオキアミとはまた極端な対比へ持ち込んでいただきました。
その極端さ加減がおもしろみですが、あまりに種明かしがストレートなので、前半に少し伏線があると推理する楽しみが生まれたのでは。
本選では点が入らなかったけれど、「惜しい」に選んでくれた班が一つありました。

９　いただきます　3位　17ポイント

ほんとに新聞コラムのよう。
身近なたとえからすっと入って、さらりと広げて一般化、日本の伝統にもきっちり言及と、コンパクトななかで堂々と王道の展開でした。
▽を使ってきたところなど、ワザですね。ただ、▽は段落替わりの記号なので、もう少し少なくてもよいかも。この長さなら、４－５コといったところでは。

１０　感謝の気持ち　9位　0ポイント

「いただきます」が続きます。かぶってしまったところが不運だったでしょうか。
こちらは、ひとつの言葉にしぼって論じて、その真剣さが伝わってきました。
さいごが、ちょっとお説教調になってしまったのが惜しい。みんなこうしようよ！　じゃなくて、自分はこうしたい、というまとめ方に変えたほうが、押しつけがましさがなくなって、よりエレガント。
こちらも本選では点が入らなかったけれど、「惜しい」に選んでくれた班が一つありました。

１１　旅 5位　3ポイント

哀しくも実りある人生、もといサバ生に乾杯！
うまいなあ、さりげない朝の旅立ちのくだりなど、特に。それを受けての「ありがとう。また逢う日まで」が、いつまでもいつまでもエコーのように心に響きます。
順位は延びなかったけれど、「サバは既にさばかれていた」などが５つの班から支持されて、イチオシフレーズ大賞受賞です。おめでとう！

１２　priceless 2位　23ポイント

天に輝くダイヤモンドリング。前回の「ひのうえのひと」さん、またしてもまぶしいような輝きの作品で、しあわせ気分満開です。
ラストもすばらしいけれど、ナナが駆け込んできたくだり、「あぁ、こういうことが何度あっただろう」と懐旧の情に浸るシーンが、とてもせつなく浮かび上がって、あにいもうと、ふたりの歴史がくっきり輝いてみえました。